

佳作

わたしのおばあちゃん

北海道

愛別町立愛別小学校二年

若林 笑見

わたしには、お父さんのおばあちゃんとお母さんのおばあちゃんとおじいちゃんがあります。お父さんのおばあちゃんはことして八十八さいになります。二年前から、にんちしようというびょうきになりました。年をとるとだれでもなるんだとお父さんがいっていました。

お父さんのおばあちゃんをわたしは大好きです。でもおばあちゃんは、わたしのことがわかりません。わすれてしまったのだそうです。わたしのお母さんも、お父さんのことも、お兄ちゃんのことわすれてしまいました。

「うーんわからない」とわたしにむかっています。

わたしがほいくしよにかよっていたとき歩くのたいへんになったおばあちゃんにうんどう会やおゆうぎ会のビデオを見てもらいました。おばあちゃんはテレビにむかつて大きな声で「笑見がんばれ！」とおうえんしてくれました。一とうしょうをとったら、とつてもとつてもよろこんでくれ

ました。わたしが食べきれないくらい、ごちそうもつくってくれました。たんじょう日には、ケーキとプレゼントをおくつてもらいました。わたしも、かたたたきをしてあげました。おふろやさんでもいつしよに入つて、うたつたり、お話をいつぱいしました。とてもたのしかったです。

そんな大好きおばあちゃんがとつぜんにんちしようになったのです。

でもいいんです。わたしにとってはにんちしようになつても大好きなおばあちゃんです。おばあちゃんとのたのしい思い出はきえません。いつまでもわすれません。だから、おばあちゃんが生きてください。そして、わたしがおとなになつて、きれいなおよめさんになるすがたを見てください。そして、おばあちゃんのためにかたたたきもします。ごちそうもしてあげます。わたしのことがわからなくてもいいんです。これからずっとわたしのたいせつなおばあちゃんです。